

石川博樹 著

## ソロモン朝エチオピア王国の興亡

—オロモ進出後の王国史の再検討—



山川出版社  
2009年 280ページ  
5000円+税

日本ナイル・エチオピア学会では、学会での発表にしろ、あるいはジャーナルに発表された論文にしろ、歴史的背景への目配りを効かせた研究を多く目にする。現在はすべからく過去の積み重ねの上にあるという考えに立てば、オーラルヒストリーであれ、歴史文書であれ、過去を参照することは必然的な手続きとなるからだ。

他方で、史資料の詳細な読解と注釈作業に基づいた歴史学研究は、エチオピア学において主流の研究分野であったものの、日本においてそれに従事する人は限られている。また、たとえば人類学者が歴史を参照するとしても、その多くはせいぜいメネリク2世の治世くらいまでの近現代が中心で、それよりはるか以前のエチオピア王国の歴史に正面から切り込む歴史学者はほとんどいない。そうした点からも、本書の著者である石川博樹氏は、日本を代表するエチオピア歴史学者だといえる。

本書は17世紀前後のエチオピア王国（現在の版図からいえば「北部エチオピア」）の王朝史、王国史を再検討しようとする野心的な著作である。書名のなかで、とりわけ重要なキーワードは「再検討」である。つまりすでに多くの研究者が「検討」し、結論を出してきたことを引き継いで、新たな史資料読解に基づいて「再検討」することが本書の目的である。そこではM. アビル、D. クランミー、メリド・ウォルデ・アレグイ、R. パンクハーストラ大家たちの業績が「再検討」のまな板にのせられており、そこに怖じ気づくことなく切り込んでいった著者の気概にまずは拍手を送りたい。

本書の内容に関する詳しい評価は、エチオピア歴史学に通じている者か、あるいはアフリカ政治史に明るい者に限られるだろう。紹介者（増田）のように、エチオピアの南部をフィールドとする人類学者には、議論の細かな点と事実関係、結論についてその妥当性を評価することは極めて難しい。にもかかわらず、本書の取り上げるトピックと立論は興味深い。

キリスト教王国であるソロモン朝エチオピアは13世紀に成立した。その中心地は長いことショア地方（現在のアディスアベバの近辺）であったが、16世紀後半に遙か北のタナ湖へ、17世紀にはゴンダールへと都を移している。本書が対象とする年代はゴンダール期とその前後の時期である。本書の特色として、資料の紹介が充実していることが挙げられる。ゲエズ語やアムハラ語で書かれた皇帝年代記、ヨーロッパ人による旅行記の数々、イエズス会士が交わした書簡などである

が、これらの資料のひとつひとつについて紹介と資料批判が行われており、本書の信頼性を高めている。

15世紀以降、エチオピア王国は度重なるムスリム勢力の侵攻に対処し、また16世紀後半にはオロモの進出にも苦慮する。こうして混乱した王国は、プレ・ゴンダール期からゴンダール期前半にかけて国を再建したものの、ゴンダール期後半には内乱が勃発したことで再び混乱に陥り、もはや皇帝が国全体を統治することが出来なくなった。それにも関わらず、王国ではソロモン朝皇帝を戴くという体制そのものは変わることなく存続したのである。こうしたプロセスを、オロモの進出やさまざまな集団の移住といった外的要因と、軍事、財政（税制）、統治機構を詳細に検討することで明らかにしようとするのが本書の戦略である。

軍事、財政、統治機構、それぞれの側面における変化を読み取り、歴史叙述において不明な点に多様な資料を駆使して推測を加えていく論述のプロセスはスリリングである。このような具体的な検討の末に、石川氏が本書の末尾においてたどり着いた発見はこのようなものである。つまり、どれだけ混乱し、どれほど皇帝の指導力が失われても、皇帝をいただく体制そのものは不変であり、その不変性を支えていたのは支配の正当性をソロモン王の血統に求める観念であった、ということである。私は1855年に即位したテウオドロス2世ですらソロモン王の男系の血筋を引いていると見なされずに十分な支持を得られなかったとする本書の記述を読んで、目からウロコが落ちる思いがしたものだ。

エチオピアの歴史に多少なりとも明るくないと、それほど読みやすい本ではない。人名、地名、制度、役職名など、無数の現地語・現地名で織りなされたゴンダール期王朝史を日本の一般読者が読みこなすのは難しいと思われる。だが、北東アフリカの文化、歴史、政治、社会に関心を持つ者は、本書にじっくりと目を通すべきである。石川氏は本書を公刊するよりも前（2005年）に高島賞を受賞しているが、氏に高島賞を授与したことは学会として正解であったと判断できるのである。

（増田研／長崎大学）